

浄

monthly
JŌDO

土
6

Jun 2009





生死の家には
疑いをもって 所止となし
涅槃の城には
みだ
信をもって 能入となす



「選択本願念佛集」

呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

6月号『安土桃山時代風俗人形』

浄土

2009/6月号 目次

阿弥陀さま(一)	佐藤春夫	2
会いたい人 山崎努さん③	関 容子	8
小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて⑤』	前田和男	16
変な駅気になる駅	村上健/長谷川裕	24
響流十方	小村正孝	30
江戸を歩く 第二十七回	森 清鑑	34
朝めし礼賛	麻生タオ	42
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
教えと法話	生野善應	

表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



浄土誌上ライブラリ 昭和15年〜16年連載

佐藤春夫

|| 子供にわかるお話 ||

阿弥陀さま
(一)



はしがき

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏——あみださまにお頼み申します。あみださまにお頼み。と人々はみなこう申しますが、いったい、阿弥陀さまに何をお願い申すのでしょうか。阿弥陀さまにお頼み申すと極楽浄土へ行けるというのです。それでは阿弥陀さまとはどういふ仏さまで、この仏さまにお頼み申すとどういふわけで極楽へ行けるのか。その極楽というのはどういうところか。それらの事どもを、毎月少しずつ、子供衆のために書いて見ましよう。

(一) 不思議なお名前

阿弥陀さまというお名前は呼びなれ、聞きなれては居りますけれど何となく日本ばなれのしたお名前です。それもその筈で、それはもとサンスクリットといって、インドのむかしの言葉のはじめの方だけを呼び慣わしているわけで、詳しくいうとアミターバとかアミターユスとかいうのが本当のようですが、この二つの言葉の上の方だけをとってそれに阿弥陀という中国の字を発音のまま当てたもので、中国でお経を訳する人がアミターバとかアミターユスとかいう原語の意味が深長で、適当な訳語が見つからないので、もとの言葉のままを阿弥陀姿耶とか阿弥陀度斯とか音訳したのがもと阿弥陀さまと呼ばれるようになったのだそうです。いかにも訳しにくい言葉らしいのですが、それでもアミターバの方は

無量光、アミターユスの方を無量寿と訳して、それで阿弥陀さまの事を無量光仏とか無量寿仏とも申します。しかしそれではやはり意味が十分にはわかりません。無量光仏というのは、この仏さまの持つていらっしゃる光が量り知れないほどたくさんにあることをいうのです。無量寿仏というのはこの仏の持つていらっしゃる光が量り知れないほど多いばかりか、その光が消えやすいものではなく、量り知れない程の寿命を持つていることを言うのです。つまり阿弥陀さまは、光明の仏さまで、その光明はいく久しい生命があつて、いくら使つても使い切れないほど量り知れない分量のものであることを言つてゐるわけです。天地の間に満ち溢れ漲る光でそれも稲光などのように消えやすいものではなく、いつまでも光輝を発しているその豊富な分量と、その旺盛な作用とを讃美したわけです。世界中で例えるものもない程に、明るい光を絶え間なく何時何時までも消えることなく持つて居られるというのがこの仏さまの性質なのです。

この仏さまの光が世界中のどの片隅にでもどんなみじめな身の上の人の心のなかにも遍く射し、どんな事情があつても決してかがやきを失う事がなく、人間の闇を照らす大きな作用をするのです。この光というのは、人間の智慧とか希望とかいふものを譬えて言つてゐるではありませんまいか。そうだとするとこの仏さまは一番大きな智慧と、何事にもめげない旺んな希望を永久に失わないお方という事になりそうです。それなればこそおすがり申しても大丈夫なわけです。

(二) 阿弥陀さまももとは

こういう立派な仏さまで居られる阿弥陀さまも、もとはやはり人間でした。人間ですが、後にこれ程の仏さまに成られるだけに普通の人間ではなく、よほどすぐれたところのあるお人で、言わば家康と秀吉とを一緒にしたようなお方です。そうしてお釈迦さまと同じように、もとは国王であつたらしいのです。何しろ遠い遠い、あまり遠いむかしの事で、何もかもはつきりよく判るというわけにはまいりませんから、阿弥陀さまがまだ仏さまに成られなかった頃の御身分やお名前などもさまざまに伝えられて居りますけれど、今は無諱念という名の王さまであつたという伝えに従いましょう。

この王さまがお釈迦さまの前身に当る宝海梵志という方と、その子の宝蔵仏との教によって修行をして仏さまになるうという志を立てて法蔵という出家者になりました。

いったい出家というものは、あらゆる世間並みの喜びを捨てて、その代りに自分の智慧や人格を磨き、この苦しい修行の出来上ったうえでは自分の智慧を一切の人類、いや生物の幸福のために捧げようという覚悟なのです。えらくなるためには人なみのたのしみ、かえりみなどはふりむきもしないで一所懸命に努力をする。それもえらくなつて、



東京小石川・傳通院にある佐藤春夫さんの墓。
(写真提供…梅窓院広報部)

自分が何かうまい事をしようとか威張ろうとかいうつもりではなく、人間一般の生活を向上進歩させ、世界をよくするという大きな理想のために、自分の苦勞や立身出世などを問題にしないという立派な心がけと、その立派な心がけを実現するためにはどんな苦しい目でも耐え忍ぶという強い意志を貫こうという生活なのです。求道者、出家というものは皆この通りですけれど、法藏という求道者は王の位をさえ捨ててしまったほどですから、並大抵の出家や求道者以上に熱心でした。そうしてわが身が仏になり、ありとあらゆる生き物を教化したいから、そのためならばどんな艱難辛苦をもものとはしないという固い決心を師の前で打ちあけて、その決心のとりの修行を刻々に勉めて行きました。法藏比丘は人格も智恵もだんだん出来て来て、法藏菩薩と呼ばれるようになりました。比丘というのは普通の求道者ですが、菩薩というのはもう一とおりで出来て来て、今少して仏になれる人なのです。仏というのはもと決して死んだ人というのではありません。人間の生れながらに具わっている本当の智恵を純粹に保って、人間の生活や世界の姿などをはっきりと悟った人という事です。そうして仏になると、みなそれぞれに自分の理想のとりの国をひらく事が出来るのです。そこで法藏菩薩は師や過去世の仏たちの援助の下に自分の国土を開こうという段になってこの思案がまた一とおりの苦勞ではありませんでした。(以下次号)

旧仮名遣いを全て現代仮名遣いに直しました。
また、幾つかの言葉を現代用語に改めました。
(編集部)

法然上人鑽仰会[講演会]のお知らせ

講師

阿満利磨

明治学院大学名誉教授(2006年4月から)

仏教雑誌『連続無窮』主宰

『法然の衝撃』『法然を読む』著者

近著『歎異抄－注解・現代語訳・解説』(ちくま学芸文庫)(2009年5月刊行)

演題

法然上人のお念仏

それまでの宗教意識を改革した法然上人の念仏。

その念仏にこめられた“思い”とは。

いまなお色あせない法然上人の魅力を探る。

会場 増上寺三縁ホール

6月26日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演(4:00終了予定)

会費 1,000円

当会会員無料

問い合わせ先

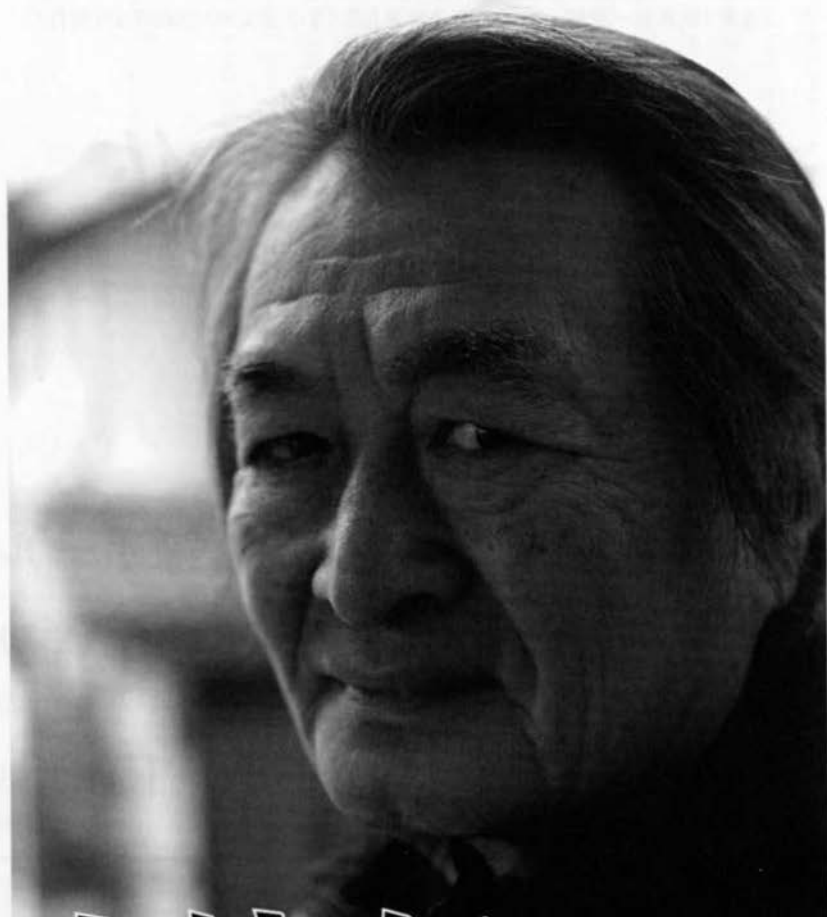
—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

連 載

会いたい人 関 容子



山崎 努^{さん}

③

撮影／タカオカ邦彦

山崎さんが演劇を志したキツカケを訊く。
インタビュウではたいいてい訊かれるから面倒がられるだろうと思ったら、その通りだった。

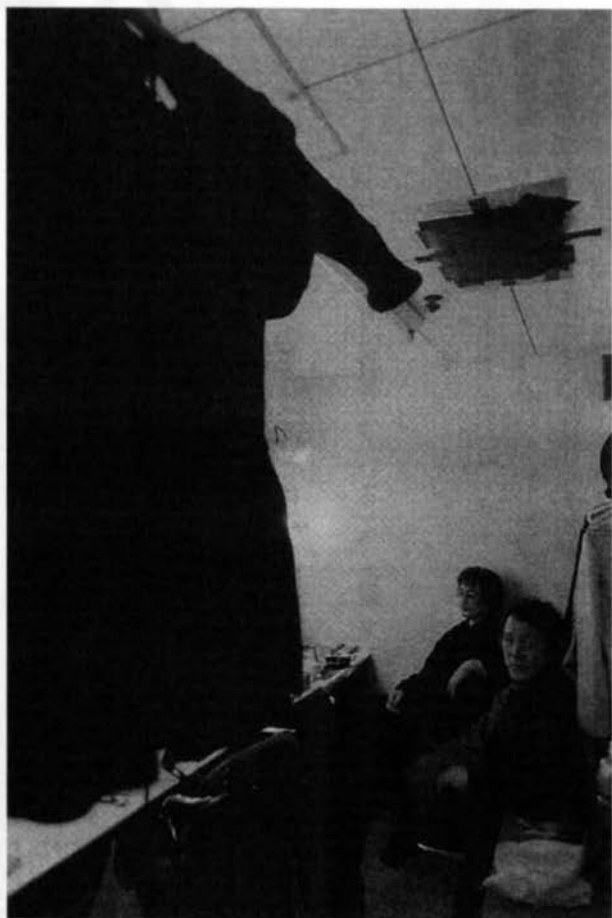
「ずいぶんしゃべっちゃったことだけど、高校時代の芝居好きの同級生が自分で演劇部を作って、文化祭で芝居をするから相手役やれ、って言われた。その友だちと芝居や映画を観たりしているうちに、俳優座の養成所は三年間だし、養成機関としては一番ちゃんとして、と友だちが言うんで、一緒に受けに行った。そしたらまあよくある話で、友だちは落ちてぼくが入ったんですね。彼のほうがほんとは好きだったのに、ぼくは誘われて入って、それからだんだんと芝居が好きになつてきた、というわけです」

養成所の授業で山崎さんがチェホフの『結婚申込み』の求婚者を演じたとき、熱演のあまり失神したのを講師の杉山誠所長にいたく褒められ、その後は男子生徒の間で失神演技

がしばらく流行った。『俳優のノート』によれば失神は「金がなくてろくに飯も食えず、貧血ぎみだったから」だそうだ。

「映画女優として既に有名だった河内桃子さんが年はぼくより上だけど同じクラスにいて、廊下ですれ違ったときにさり気なく手を握ってきた。やや！と思つたら掌の中に恋文、じゃなくて（笑）、小さく畳んだ千円札があつた。当時の千円はいまの一万円くらい。ぼくが貧乏のポーズをとってたんで、河内さんはお嬢ちゃんだから本気にしちゃったんだと思う。向うのほうが恥ずかしそうに笑つた。いつか出会つたらあのお礼を言おう、とずっと思つてるうちに河内さんは亡くなつて、残念だけど、そういうことつてまああることだしねしょうがない」

山崎さんの映画デヴューは『天国と地獄』かと思われがちだけれど、実はそれ以前、七本の映画に主演級の役で出ている。その二本目が豊田四郎監督の『東京夜話』だった。



「ヘンリー四世」(1991)の舞台稽古の楽屋で伊丹十三さん(手前)と。

「ぼくの俳優生活で、ちよつと、ふざけんじやねえ、つて言いたくなるくらいしぼられたのがこのときの豊田四郎さんと、劇団雲のころの『ドン・ジュアン』を演出したジャン・メルキユールという人。この二人は似てるんですよ。小柄で、胆汁質で、ねちこいの。誰かをいじめてないと不安なたちらしいんだ。『東京夜話』では、最初ぼくが徹底的にいびられて、後半は標的が別の人に移つて、ぼくはセーフになつたけどね。しばらくして、豊田先生がぼくの芝居を観に来た。ロビーにいるから御挨拶を、つて事務所の人に言われて、いやいや行つてみたら、あの人は関西の人でね、あんた、うもなつたなあ、つて（笑）。そんな、何か月もたつてないから變つてないはずなのに（笑）。氣にしててくれたんだな。実は優しい人だつた」

昭和三十八年、山崎さんは『天国と地獄』の虚無的な誘拐犯役で一躍脚光を浴び、「シ

ンデレラ・ボーイ」と騒がれた。「天皇」と呼ばれたあの黒澤明監督との相性はどうかだったのだろう。

「黒澤さんとはどういうわけか、合っちゃつたんですね。おだててくれたんでしょけれど、好きなようにやれ、つて言つてもらつたのがよかつた。三船敏郎さんにも可愛がつていただきました。三船さんはぼくには『復員兵』というイメージが強いんです。事実そうだった。御実家が写真館だったからカメラがいじれるので、復員して就職しなくちゃというときに、東宝のカメラ部門に行つたら、あの通りハンサムだから、まず山本嘉次郎監督に俳優のほうへ引つ張られたんですね。復員兵というのは、つまり俳優としてスタートする前に挫折を味わつてますから、世の中に対する憎悪とか嘲笑があつて、たとえば『七人の侍』の菊千代なんかを見てもあの哄笑はすごいでしょう。戦争で生き残つた男がヤケツパチになつてゐる感じがある。それが演技に反映されてま

した」

『天国と地獄』の三船敏郎は、自分の子と間違えられて運転手の子供を誘拐される社長の役。

「見かけの豪放さとは違う細やかな神経の繊細な人で、優しくてチャーミングでした。砧の撮影所から成城学園駅まで、真つ赤なMGのスポーツカーを自分で運転してよく送ってくださった。俳優としての技術がうまいというタイプじゃなくて、何かにとりつかれたみたいにその役になっちゃう。あのときも町の靴屋から成り上がったワンマン社長にみごとになってた。三船さんはひとの口調を真似るのがうまくて、よくぼくの真似をして回りを笑わせるので、ぼくも三船さんの真似で応酬して遊んだりしました。封切後、犯人役が話題になって、ぼくにマスコミの取材が殺到したら、三船さんが引き立て役に回ってくれて、いいんだ、いいんだ、俺はどうせ刺身をつまだよ、なんて（笑）、天下のミフネが拗ねて

みせたりしてくれて。あの人は大スターにして、名優だった、と思います」

三船敏郎は平成九年十二月二十四日に亡くなり、その四日前には山崎さんの主演映画三本を作った伊丹十三が亡くなっている。新国立劇場の『リア王』初日を直後に控え、精神的にさぞ大変だったことだろう。

「暮れの二十一日の午前三時。女房に起されて伊丹さんの死を知りました。何があつたのかまったくわからなくて、ただ悲しくて、やたら空しかったですね。今度の芝居は伊丹さんに観てもらえないんだな、というのが脳裏をよぎった。彼とはお互いにファン同士として友だちづきあいが始まって、なんか近ごろの映画は俳優として出てても面白くないね、自分が面白いものを作るしかないね、って言うて、今度作ることになったから出てくれないか、と言われて出たのが『お葬式』でした」

山崎さんは『お葬式』（昭和五十九年）、『夕

ンポポ』(同六十年)、『マルサの女』(同六十二年)と、たて続けに伊丹作品三本に主演した。中でも私の好きなのは『タンポポ』で、山崎さんは流れ者ふうのトラック運転手ゴロー。相棒のガン(渡辺謙)と共に、ふらりとさびれたラーメン屋に入り、店の女主人タンポポ(宮本信子)をふと助ける気になって、町一番のラーメン屋に仕立て上げるが、タンポポとその息子に慕われながらも去って行く、という西部劇の『シェーン』を思わせる映画だった。山崎さんはこのとき男ざかりの四十九歳。「伊丹さんは優秀な映画監督でした。ただ、彼の文章はもつといい。『女たちよ!』にしても、彼のエッセイは素晴しかったですよ。ぼくは三本目に出たあと、意見のくい違いがあつて出なくなりました。たいした喧嘩じゃなかったけど、いつも何々組みたいに一緒なのは不自然なことですよ。演劇の集団だってせいぜいもつて五年だと思う。だって、生きるものだからどんどん細胞分裂して行くの

が健康なんだと思いますよ。それが予定調和になつちやったり、全部先が読めちゃったり、硬直してくると、やつてても意味がなくなる。伊丹さんとほくもそうで、やがてまたどっかでくつつくときがあるだろう、と思つてただけだ」

最近、山崎さんの出た『ラーメンガール』という映画を観た人から「才気煥発なところがちよつと伊丹映画を思わせる」と聞いた。舞台の演出家として名高いアラン・アッカーマンの監督作品だから、きつとそうかもしれない。

「アッカーマンさんはよかったですよ。恋人を追つて日本へやつてきたアメリカ娘がラーメン修行をするという、粗っぽい本でね。だからぼくのラーメンの家元みたいな役を監督には言わずに工夫してみよう、と思つた。本番のときに、ずっと居眠りしてて、もう仮死状態みたいになつてることにしたのね。アッカーマンさんはぼくの狙いがすぐにわかつ



で、えらく気に入ってくれ、それからあとはずっとうまくいった。映画俳優はいい監督、肌の合う演出家に出会いか出会わないかで、不幸が決まるんです」

山崎さんは折にふれて大先輩芥川比呂志のことを思うことがある。

「最後は入退院をくり返していて、亡くなる少し前もちよつと顔を見に寄ると、帰さないんですよ。ひとの演技や作品を面白おかしく褒めまくって。アラは探せばいくらでもあるだろうけど、そっちへは行かないで、面白

いことを面白がって楽しんだほうがいい、という精神。とても教えられました。悪口を言うのは下品で貧しいことだけど、褒めることは高貴で豊かでぜいたくなことだな、思っただ。それでこの間、偶然丸谷才一さんにお会いしたときに、ふと芥川さんのことを思い出した。ぼくの好きな先輩たちが、努めて陽気に明るくしてるのがすごく好きですね」

このインタビュ어가キツカケで丸谷さんと山崎さんが親しく何度か会うことになったのは、最初に山崎さんが「恵比寿で」と私に場所を指定したからだった。

「突然丸谷さんに会えたときはびっくりしたなあ。あの人の書く物には、俺がこう思っただけ書いて何が悪い！ という腰のすえ方があるでしょう。あの一種乾いた感じと割り切り方は何なのかと思っただ、一度実感したかったんですよ。会ってみて、ウーンと思いましたが。丸谷さんの大音声は有名だけど、初めは淡々と穏やかで、あれ、と思った。そのう

ちに少し酔ったらやっぱり大音声になった（笑）。陽気で、スカッとしてるのね。ぼくははじめじめした日本人が大嫌いなんだけど、あの人はまったく日本人離れしてる。ぼくもああいうふうになりたいと思いましたね」

別のとき、丸谷さんも言う。

「とにかく彼は知識人。ハムレットが持つて出る本がラテン語の本に見える役者は、芥川さん以降は彼しかいないかもしれない。近くでナマの肉声を聞くと本当に渋くて深みのあるいい声なのに、あれを舞台で聞かせてくれないのは実に残念だけど、現状では彼を生かせる演出家がちょっといないのかもしれないなあ」

でも山崎さんはもう舞台に出ないと決めたわけではないのだろう。

「ぼくは固定観念は持たずに、価値観にとらわれないことが人生の楽しみ方だと思っただけです。だから今は映像を面白がっているだけです」

（この項 おわり）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月

を求めて

前田和男

第五回

カルピスの
命名者として
三島海雲との交遊録その2



関東大震災で共に救援活動

三島はカルピスをごくりと飲（や）って一息いれた。うまい。われながら生涯の傑作だと三島はひとりごちた。山田と海旭とのカルピス誕生秘話を思い出したことで、きょうはいっそううまく感じられる。コップのなかでとけた氷がカランと鳴った。戦後復興もない時期で、氷はなかなか手に入らない嗜好品だった。これを入れて飲むとカルピスはますますまい。氷を一欠片（ひとかけ）、初恋の味が残る口中にふくんで、舌先で転がしていた三島は、心地よいひんやり感とともに、あの大事件のことを思い出した。

——そうだ、このラジオ番組には、海旭との関係を語るのに、もう一つかけているものがある。

それは関東大震災と氷入りのカルピスだった。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分。帝都・東京を中心とした首都圏は未曾有の地震に襲われた。東京朝日新聞はその模様を次のように報じている。

「帝国政治機構の中枢であり、東洋の文化の中心である帝都は地震と地震に因る火災のため忽ち一望千里の焦土と化し、一瞬以前の繁華と殷賑は夢の如く消え去った」「蓋し有史以来の大天災。いかに最大級の文字を以てするも、此の戦慄すべき凄愴なる光景を彷彿せしめることはできぬ」

そのとき三島は、渋谷区恵比寿のカルピス本社に出勤していた。その付近は山の手の地盤もしっかりした地域で、ほとんど家屋の倒壊も火災もなく無事だった。しかし、東京市内は惨憺たる被害をこうむった。家屋の倒壊や類焼もさることながら、罹災者にとってもっとも深刻だったのは水である。水道がとま

つたため多くの人々は、飯もたけず、近くの池や川などに水を求めた。芝の増上寺の蓮池もそうした人であふれているとの情報を得た。三島は、決然と起つ。このままほっておけば、疫病がはやりとんでもない二次災害を引き起こす。幸いにもカルピス本社は水道も使用可能だ。だったら、これを困った人々に配ろう。そこでアイデアマンの頭がひらめいた。

——そうだ、どうせ配るのならわがカルピスを入れよう。九月はまだまだ暑い。水を入れてさらにおいしくしてロハで配ろう。これぞ日ごろの愛顧にこたえるものだ。仏教でいう「報恩」である。

三島は即行動に移した。金庫を開きありったけの二千円を当座の費用にあて、トラックを一日八十円で借りて、翌九月二日から東京中を配ってまわったのである。

三島のユニークな取り組みはマスコミの目にとまり、「大阪毎日新聞」九月三日朝刊で

次のように報じられた。

「芝の海岸から増上寺の前に行ったところ、向こうのほうで、バケツに米のとき汁のようなものを配給していた。何だろう近づいてみたら、それは水で冷やしたカルピスであった。広告といえども感心である」

カルピス・キャラバン隊は東京中で大歓迎をうけた。結果として大いなる宣伝効果を上げたのである。

——いやいや、あのときの渡辺海旭の救援活躍に比べれば、われらカルピス・キャラバンごときは：

と三島はグラスの中の水をコロンと転がしながら往時を思い起こした。

三島の会社は被害はなかったが、海旭の自宅兼職場、西光寺のある深川は、まさに阿鼻叫喚の地獄に飲み込まれた。前掲の東京朝日新聞によれば、その惨状は以下のごときであ

った。

「陽漸く沈まんとする頃より猛火は山の手方面を残して殆ど全市を押し包み、黒煙天に沖し、折柄の旋風に倍倍威力を加へて紅蓮の焰は縦に毒舌を閃かす。(略)四谷、神田、下谷、浅草方面を舐め尽した猛火は本郷、千住、深川、日本橋、京橋、麴町、芝、赤坂方面に於いていよいよ暴威を逞くし、火光は遠く軽井沢方面より望み得るほどの強さとなった」

この年海旭は増上寺の教監に任じられ、早朝日曜講演を受け持ち始め、多くの信奉者を集めていたときだったが、この大震災で自坊の深川の西光寺は消失。完成しかけていた「孔雀王経の研究」「理趣経の研究」などの論考をはじめ重要な資料が灰燼に帰した。また海旭が心血を注いでいた貧者救済の「労働共済施設」も悉く失われた。着の身着のままで何とか難を逃れた海旭は、校長をとめる芝

中学が奇跡的に延焼をまぬがれたので、そこへ起居して、即座に活動を開始する。

そのときの海旭の決然たる姿を、当時芝在校生で後に教頭をとめる吉田政男が目撃している。吉田が学校にかけつけてみると、寄宿舎の手前で火は止まり、校舎は無事だった。と、本館正面に人の気配がする。海旭だった。その姿たるや尋常ではなかった。ゆかたに兵児帯をしめ、腰には日本刀を手挟み、片手に大きなにぎりめしを握っている。吉田が気おされながらも「学校が無事でよかったですね」と声をかけようとすると、「うむ、しっかりせい」と逆に励まされたという。まさに艱難にあたる男の気概ここにあり、の光景である。

海旭は、芝中の全校舎を近隣の罹災者に開放するいっぽうで、深川周辺の救済施設を復旧させながら困窮する人々の救援にあたっていた。また、焼失した芝郵便局を校内に臨時開局させ、混乱のきわみにあった通信の回復へ支援を行なった。

こうした海旭の活動を知って、三島はカルピス・キャラバンとはレベルが違うと大いに感服させられたものだった。とくに臨時郵便局の開設支援は画期的だった。大災害の恐ろしさは二次災害にある。ライフラインの破壊による生活破壊ももちろんだが、通信機能が麻痺することによる「流言蜚語災害」も恐ろしい。実際、関東大震災では「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んでいる」との風評によって多くの韓国・朝鮮の人々が殺された。災害時ほど正しい情報をすべての人にいち早く届けることが課題になる。これを認識していた海旭はただものではない、と三島は当時を思い出して改めて感じ入った。

このセンスは大伽藍にこもる学僧ではもちえぬものだ。すぐれた事業家にも通じるセンスの持ち主だ。三島は、海旭のことをパトリ―語で経典を読み、ドイツ語で論文を書いて博士号を取得した碩学として認め、だからカ

ルピス命名の意見を求めたわけだが、どうも碩学をはるかに超えた、もっと大きくてつかみどころのない存在に思えてきた。

銀座カンカン娘とカルピス

しばしば海旭との追憶にひたっていた三島だが、いつの間にか「光を掲げた人々」は終わって、歌謡曲の時間になったらしく、ラジオから突然聞きなれた唄が流れてきて、われにかえった。これまた三島にとっては「重大事件」をもたらした因縁の曲だった。

♪あの娘可愛いや カンカン娘…

そう「銀座カンカン娘」である。作詞・佐伯孝夫、作曲・服部良一、歌・谷真西美。昭和二十四年（一九四九）四月ビクターレコードから発売されて、たちまち大ヒット曲となったが、三島にとって「重大事件」とはこの

春動祥光滿鳳幃笙歌韻合
瑞雲輝交枝芳苑雙松茂比
翼晴空兩鶴飛大德奉親連
錦綉貞順潤屋列珠璣家門
福樂天緣永琴瑟相和頌
國威

昭和七年二月十日恭頌
玉置源一郎君華燭盛典 海旭

上掲、相馬氏宛書翰の一節
右は灌佛偈（岩野氏藏）
下は西光寺檀家總代玉置氏令息率
燭の典に寄せられしもの

藍毘降聖幾千秋依舊春風
滿五洲甘露水香花爛漫普
天盡地悉無憂

汪東滬旭

歌の四番だった。

カルピス飲んで カンカン娘

一つグラスに ストロローが二本

初恋の味 忘れちゃいやよ

顔を見合わせ チュウチュウチュウチュウ

これが銀座のカンカン娘

これが銀座のカンカン娘

金を積んで佐伯に書いてもらったわけではない。頼みもしないのに勝手に書いてくれたのである。突然天から小判がふってきたようなもので、なんともありがたいことだった。敗戦の痛手から立ちなおるのに新宿中村屋も相当苦勞したらしいが、三島のカルピスも大変だった。それを救ってくれたのが、「銀座カンカン娘」の四番だった。

この歌のヒットをうけて、同名の映画もつくられた。監督は島耕二。終戦直後の日本で

貧しいながらも夢をもって健気に生きる姉妹を、笠置シヅ子と高峰秀子が演じて話題を呼んだ。封切りは歌より四ヶ月後の昭和二十四年八月十六日。歌との相乗効果でカルピスの売り上げ増に大いに寄与してくれた。

三島はふと思った。このカンカン娘について、カルピスの命名者・渡辺海旭はどういうだろうか。あの大きな目をいからせて「けしからん、不謹慎のきわみだ」というだろうか。いやいや、そんなことはあるまい。あの男はおもった以上にさばけている。なにしろ晩年は禁酒運動の急先鋒で知られていたのに、ドイツ留学時代はビールをあびるほど飲んでたというのだから、ラジオ番組で知ったエピソードをもって「自問」に反論している自分に三島はおどろいた。

ラジオ番組に違和と不満をおぼえた三島だったが、導入に使われたドイツ留学時代のエピソードはきわめて興味ぶかった。四月八日の花まつりの夜、海旭が留学生仲間を語ら

って祝宴をはり、お釈迦様にビールを献杯したという話は、初耳だし、驚きでもあった。生来の禁酒主義者と、若い頃にビールもさんざ飲み尽くした果ての禁酒主義者とは深さがちがう。前述した関東大震災の救援活動もそうだが、どうも渡辺海旭という人物を「当代随一の仏教学者」として一面的にしか見ていなかったのかもしれない。この男は意外にも奥が深くてつかみどころがない。三島にはそう思えてきた。

カルピスが機縁となって海旭と出会ってから戦争を挟んで三十年あまりが経つ。

戦争時代はある意味で目的が明確で生きやすかった。いまは「銀座カンカン娘」のように明るいのだが、空元気に思えてならない。それはきつと戦後の日本がどこへ向かおうとしているのか先行きが不透明だからだ。こんなときに海旭が生きていれば、いったいどんな指針を示すだろうか。

三島海雲は、ラジオ番組がつくってくれた

久方ぶりの再会を祝うかのように、西光寺に向かつてカルピスのコップ高くさげ、残りを一気に飲み干した。三島の中で、渡辺海旭という男がより大きくつかみどころがない存在として膨らむのを覚えながら。

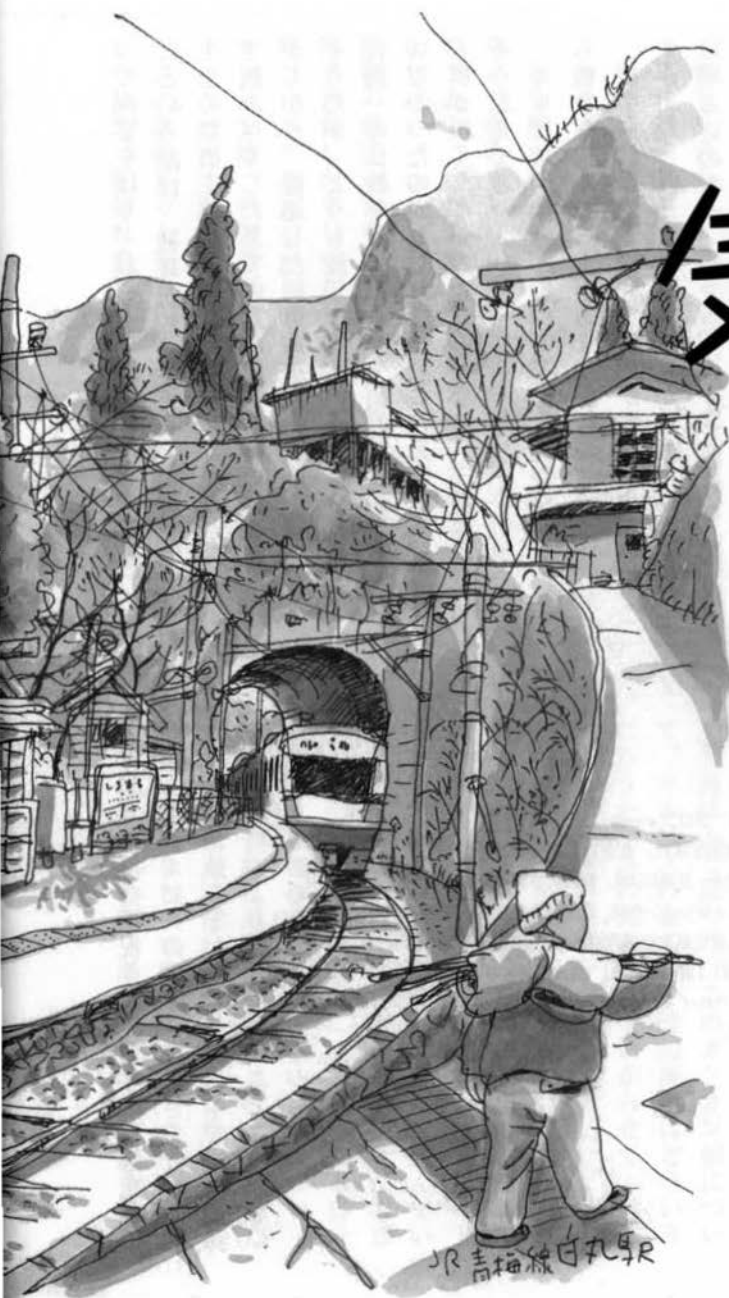
●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

変な駅 気になる駅

《凸凹コンビがおくる駅前シリーズ第二弾》

え 村上 健
ぶん 長谷川 裕



JR青森線白丸駅

青梅線白丸駅 不遇の山水



健

なぜかなこめる 無人駅

東京の奥庭、奥多摩を走るJR青梅線。その終点、奥多摩駅のひとつ手前に白丸という駅がある。山中に置き忘られたような無人駅で、とりたててこれといった特徴はない。しかし、なぜかなこめる駅である。

青梅線の立川から青梅までは団地や建て売り住宅が建ち並び、都市近郊の風景が続く。が、青梅を過ぎると、あたりはしだいに山岳線の様相を呈しはじめる。電車は右へ左へ身をくねらしながら奥多摩溪谷の河岸段丘沿いに山中へ分け入っていく。一昨年から同線に投入された最新鋭のE233系電車も、このカーブではスピードが出せない。

短いトンネルをいくつか抜け、白丸駅に着く。トンネルとトンネルの間にぽつんとあるホームに降りたのは私だけ。電車が出て行ったあととはしんと静まりかえる。山の冷気が迫る。シジュウカラがツツピーツツピーと落葉樹の梢で鳴いている。



周囲は民家数軒と踏切の他に何も無い。狭くて短いホーム、赤い瓦屋根の申しわけ程度の駅舎。施設といえばSuicaの簡易改札器と自動券売機が一台ずつあるばかり。ホームの小さな待合室に「熊出没注意」の貼り紙があった。

「平成20年9月17日(水)7時頃、奥多摩町原、倉戸山登山道において、ランニング中の男性が親子の熊に突然襲われて大けがをしました。今後被害の発生が予想されますので、十分に注意してください。もし、熊を目撃した場合は、消防署、警察署、町役場等に情報提供をお願いします。東京消防庁奥多摩消防」

東京広しといえど、熊出没注意の貼り紙がある駅も、そう多くはあるまい。

ホームをうろうろしていると地元の人らしい中年男性が山道を降りてきた。次の青梅行きに乗るらしく、時刻表を見ている。山中の無人駅に壮年の男が二人というのはなんだか気まずい。相手もそう思っているようで、横を向いて煙草を吹かしたりしている。

こちらも視線をそらしたら、駅の横にある民家の裏口がそのままホームとつながっているのを発見した。あれま、この家、便利でいいなあ。通勤、通学

はぎりぎりまで朝寝坊できそうだ。終電が通ったあとはしーんと静かで、秋の夜なんぞ、さぞかししみじみとするだろうなあとも思う。

本当かどうかは知らないが、白丸は東京都下のJRで乗降客が最も少ない駅と言われる。たしかに乗り降りする人は青梅線の中でもとりわけ少なそうだ。とはいえ駅の周囲には民家が散在しており、けっして秘境駅というわけではない。ここがなごめるのはこの民家があるからだろう。この駅を日ごろ利用している人たちをなんだかうらやましく思う。

もとはといえば 石灰岩輸送が目的だった

それにしても乗客の見込めないこんな山中に、なぜ鉄道を敷いたのか。実はもともと青梅線(旧青梅鉄道)の大きな目的はこの付近で採れる石灰石の輸送にあった。

青梅は昔から石灰の産地として知られ、成木産の石灰は江戸城の築城に用いられた。幕府の手によって青梅街道が整備されたのは、この石灰を江戸まで

運ぶためであった。青梅街道は「石灰の道」「白粉道」とも呼ばれ、漆喰を積んだ荷車が盛んに往来した。

明治になって青梅の石灰岩は大きな注目を浴びる。近代化に欠かせないコンクリートや製鉄の原材料となるからだ。その石灰岩を中央線の前身、甲武鉄道と連絡して帝都まで輸送すべく、私鉄の青梅鉄道が青梅―立川間に開業したのは明治二十七年（一八九四年）。いまから一二五年も昔のことである。長い歴史のある路線なのだ。

石灰岩の需要は年々増大し、青梅鉄道は電化されて青梅電気鉄道となり、あらたな石灰岩を求め奥多摩溪谷ぞいに延伸していく。白丸駅が開業したのは青梅電気鉄道、奥多摩電気鉄道が国有化され、現在の青梅線に統合された一九四四年のことだ。戦時体制下、増産のかけこえがかまびすしかった時代である。

資材不足のなか、難工事について氷川（現在の奥多摩）まで延伸させたのは、氷川で採れる石灰岩が戦時体制下の製鉄、土木工事に欠かせなかったからだ。また一九三八年には小河内ダムが起工されてお



り、ダム工事のベースとなった氷川まで資材を運搬する必要もあった。

そう言っては白丸駅に可哀想だが、ここは産業目的の鉄道を敷設したついでに、おまけで作られたような駅である。最初から不遇なのだ。

それでも青梅電気鉄道は、武蔵御嶽神社のある御嶽駅や奥多摩登山のベースとなる氷川駅には、そこそこ観光収入も期待していたようで、それぞれ立派な駅舎を与えている。とくに山小屋風の氷川駅は、もはや観光どころではない敗戦の一年前によくもまあと思える、おしゃれな駅舎だ。鼻息の荒い軍人が

見たら、この非常時になにごとかと怒り出しそうだが、すでに施工は戦局の悪化する数年前から始まっており、また、そう人目につくところでもないということでお目こぼしとなったのであろう。

それにくらべて白丸駅のまあ、なんとも素っ気ないこと。しかし、それがこの駅の好ましい味となっている。

不遇のまま

放っておいでください

青梅鉄道が開業した一八九四年、小説家の田山花袋は「不遇山水」という奥多摩巡りの紀行文を記し、帝都のすぐ近くに位置しながら、なぜか人々に顧みられることのない奥多摩の溪谷美を「不遇」であると嘆いている(青梅鉄道が開通したのはその半年後)。花袋は四ッ谷から小河内村まで徒歩で探勝している。

青梅線が延びるにつれ、奥多摩の溪谷美も人々に知られるようになっていくが、皮肉なことに奥多摩の名を知らしめた小河内ダムが一九五七年に完成す

ると、巖を激しく洗っていた多摩川の水量は激減、かつての溪谷美は失われた。

さらに一九六三年、小河内ダムの下流に竣工した白丸ダムがとどめとなる。ダム湖のため鳩ノ巣溪谷の核心部は水没、人々の目から永遠に隠されてしまったのである。ダムさえ造られなかったら白丸駅は観光地として栄えたかもしれない。直下は鳩ノ巣溪谷の核心部だったのだから。その意味でも不遇であった。

輸送形態の変化で、かつて青梅線を走った石灰岩輸送列車もトラックにとって代わられ、姿を消した。いまは三十分一本ずつ短い編成の電車を通るだけである。

駅の周辺を一時間ほどぶらぶらしてから戻ると、ホームでは高校生とおぼしき若者がしきりに写真を撮っていた。おそらく鉄ちゃんだろう。どうやらここもマニアの間で人気となりつつあるようだ。

白丸はおだやかで静かな駅だ。やはり野に置けすみれ草ではないけれど、あまりかまわず、不遇のまま放っておいてほしいところです。

ただし人の死の縁は、かねておもうにもかない候そうらわず、にわかには大おお路おじみちにて、終おわる事ことも候。又大小便利のところにて死ぬる人も候。：(中略)：火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼす類たぐいのおく候そうらえば、さようにて死に候とも、日ごろの念仏申して極樂へまいる心だにも候人そうらうひとならば、息のたえん時に、阿弥陀・観音・勢至、来たりむかえ給うべしと信じおぼしめすべきにて候なり。

(法然上人『往生浄土用心』)

人がどのような死を迎えるかなど、日ごろ考えている通りになるものではありません。せん。往来で突然倒れて亡くなる方もあれば、用便の最中に亡くなる方もあります。：(中略)：火事のために、あるいは水難で命を落とす人も多くあります。しかし、たとえそうした最期であったとしても、普段からお念仏を称え、極樂浄土へ往生したいという思いがあれば、今まさに息が絶えようとする時、阿弥陀さまは観音菩薩、勢至菩薩を従えてお迎えに来てくださるのだと信じるべきです。

死のシミュレーション

先日、恩師がこれまでに書いてこられた原稿を、一冊の本にまとめるお手伝いをさせていただいた。預かった原稿を読み進める中、浄土宗第三祖良忠上人の著書『看病用心鈔』を取り上げた稿に、深い印象を覚えた。

題名からもうかがえるように、看病に際しての心得を記した、いわば終末期看護のマニユアルの性格の本だ。恩師はその稿で、この典籍は「いのち」をめぐる現代の複雑かつ深刻な環境においても極めて高い有益性を発揮すること、そして、現在の仏教ホスピスやビハーラ運動の原点を訪ねる上で重要なポジションにあること、これらの点を再認識する必要があると指摘されている。

実際に読んでみると、浄土宗の僧により書かれたものであるから、当然「浄土への往生」に関する記載が見られる。つまり、ここに記された用心（心得）は、「死後を視野に入れない生」に対するものではなく、死後（往生浄土）を見据えた上での看病心得、ということである。言い換えれば、余命短い病人へ向けられるべきすべての所作は、あくまでその人が極楽浄土への願往生心を強めるための意義を担うもの、ということであり、一貫してこれを強調している。あたり前、との声も聞こえてきそうである。が、そうだろうか。浄土教の範疇においてはあたり前の理論であっても、実際の医療現場ではそうではない。

つまり、ほとんどの医療機関では、来世観や死生観を伴った看病がおこなわれているわけではない、ということだ。もっともなことである。一般の医療機関に従事する者が、特定の宗教にもとづく来世観や死生観を提示することは許されない。もちろん、小生はそこをあらためよう、というのではない。

この地球上には、毎日、無数の「人の死」がある。しかし、辛辣な表現をすれば、そのうちのほとんどは、「わたし自身」にとって直接の関係はなく、また、知る由もない。仮に報道などで知り得たとしても、あくまで第三者としての捉え方しかできない。たとえそれが、共感を抱く人物であったり、深い同情を誘う死であったとしても、「わたし自身」にごく近い人の死のように肌身で実感するような体験ではない。さらにいえば、ごく近い人が亡くなった場合でも、「わたし自身」に起きたことのように正確に捉えるなど、不可能に近い。自分の死を自分で経験すること（振り返ること）さえできないのだから。

とすれば、明日、いや今日にでも訪れる可能性のある「わたし自身の死」についてなど考えようもしない、そうした風潮（時代を超えた）は当然のことなのかもしれない。皆、それこそが「生」を充実させるためのコツであると悟ったような顔をしている。生きている者にとって、来世はもっとも近い問題で

あるはずなのに、もつとも遠いところに追いやられているのが現実なのだ。

こうしたことに思いをめぐらすとき、「自分の最期の迎え方を、自分が主体的に決めることが大切」との恩師の示唆が、あらためて心に響いてくる。

主体的に決める、といっても、「いつ、どこで、どんなふうに」終焉を迎えるかを自分で決めよ、というのではない。それは無理である。「死の縁は、かねておもうにもかない候わず」なのだから。

恩師の本意は、法然上人の言葉にもあるように、どのような最期であっても、「わたしには、生まれ往くべき極楽がある、阿弥陀さまに迎え摂とっていただける」と、平生から思い定めよ」ということと受け取らせていただいた。そしてそのためには、今日まで多くの方が指摘されてきているように、やはり自分自身の死をシミュレーションすることが不可欠に違いない。「〇〇で死んだら……」をいくつも想定してみることにより、「わたし自身」の死と、その先にある来世（極楽）がリアリティをもつて「わたし自身」に近づいてくるはずなのだ。わたしが死ぬなど、まだまだ先のこと——そう思う人にこそ、死のシミュレーションは必要なのかもしれない。そしてこれが、来世を、今生を、「たしかなもの」とするための術なのだと、思いを新たにしたのである。

（小村正孝）

第二十七回

江戸を歩く

外神田へ



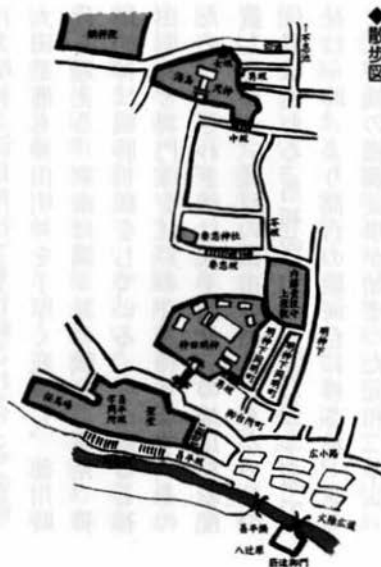
森清鑑

大江戸ウォーカー

神田明神

筋違い御門の西側、昌平橋を北に渡る。眼下に深い神田川。左河岸は急な淡路坂。斜め左の川向こうに昌平坂学問所の練り堀がうねり上がっている。橋の中央に立って東西を眺めると、正に風光明媚な景色が展開している。爽やかな風を肌を感じつつ橋を渡ると筋違橋の火除広道に出る。直進すれば明神下。左に曲がると学問所の堀角。右折して左の堀沿いに坂を登る。この道は狭いがこども昌平坂である。堀に沿って登り切ると広い道に出る（門前板橋街道、本郷通りを経て日光御成道へと続く）。堀に沿って左に曲がる。すると、前方右手に神田明神の大鳥居が見える。鳥居の左手に甘酒、天野屋の暖簾。鳥居からやや坂を上がる楼門（隨身門）まで、表参道の左右には民家が密集している。明神門前と明神西町。楼門を潜ると広い境内。正面に本社が聳え、その左手、隣接して御供所（明神資料

◆散歩図



館）。本社までの境内右手には楊弓場、湯立所。左手は午頭天王三社。そして本社の裏手には人丸、大黒、住吉、三峯、太神宮などの小さな社が並んで建っている（現代は籠祖神社、末広稲荷、三宿稲荷、金比羅神社、浦安稲荷、江戸神社、魚河岸水神社、大伝馬町八雲神社）。楼門を潜るとすぐ右手に急な石段がある。裏門に通じる男坂。この石段を下り切ると左側が同朋町、右側が御台所町の家並み。さらに進むと銭形平次でお馴染みの明神

下（明神下の親分）である。その敷地は江戸総鎮守の名声に比してさほど広く感じられぬが（江戸期は現代より若干広い）、江戸文化が煮詰まった風格があり、湯島台地の高台に鎮座しているため、遙か彼方まで眼下に江戸の町並みを望め、江戸湾まで見渡すことができた。

神田明神は江戸の総鎮守府、江戸城の産土神^{うぶすな}。神田全域は言うに及ばず、東は日本橋界隈から、大伝馬町、小舟町に至るまで、西は九段下、元飯田町。南は大手門から京橋まで百八町の住民が氏子である。「神田の生まれよ」とは神田明神の氏子であることを言外に誇っている。それほど江戸庶民の崇拜を集めた神田明神の歴史は大手門前から始まった。祭神は大己貴命（^{おおのむねのみこと}大国主命、だいくく様）と平将門命（^{へいさけのみこと}二座。場所是将門公の首塚（大手町一丁目一番地）の辺り。時代は天平二年（七三〇）に遡る。出雲から国造^{くにぞう}として派遣された真神田臣^{まかんだのおみ}が祖先の大己貴命をこの地

（武蔵国豊島郡柴崎村）に祀る。当時の地形は江戸前島。江戸湾の波が押し寄せ、日比谷の入り江が深く入り込んでいる。それから二百年後の平安期。独立国建設を夢見、朝廷に背いたとされる武蔵の雄、平将門が戦に敗れ（承平天慶の乱）、その首は京に送られ、七条河原に晒された後、この地に葬られる（将門塚）。さらに三百六十年後の千三百年代に将門の霊を合祀し、名称も神田明神となる。そして江戸平川沿いにあった江戸氏の氏神、江戸大明神（江戸神社）も合祀される。その後、太田道灌も神田明神を手厚く庇護し、徳川時代を迎える。家康は関ヶ原の戦いに備え、神田明神に戦勝祈願をしている。事が成ると神田明神と将門塚を江戸の守護神となす。そのため、わざわざ彼は大手門をこの地に移転配置している。江戸の都市計画にともない社の位置は変わる。当初の江戸湾埋め立て工事で、社は一時、より高台の駿河台に移され、さらに江戸城の拡張工事が始まった元和二年（一

◆広重絵 神田明神曙之景
中央眼下に江戸の町並み



六一六)に湯島台の現在地に遷座するのである。幕府は、豪華な社殿を造営し、神田明神を江戸の総鎮守府とした。そもそも神田という地名はどこからきたのであろうか。諸説があるが、江戸前島に大己貴命を最初に祀った真神田臣から神田、神田明神が将門のからだを祀ることから、「からだ」がなまって神田となった。この二説が有力であるが、伊勢神宮に奉納する初穂を作るための神の田んぼ(神田＝みとしろ)から...という説もある。

神田明神は江戸城の鬼門封じに位置する。これを指導したのが南光坊天海。家康の信任厚く、神田明神の延長線上の鬼門に上野寛永寺を建立。南の裏鬼門に増上寺が控える。そして將軍の菩提寺とした。こうした配置は江戸の都市計画造りに関係してくる。江戸城を中心に大手門、将門塚、神田明神旧地から時計回りに堀が蚊取り線香のように渦巻いて造成され、城から放射線状に五街道が地方へと延びているのである。

江戸期、神田明神と平将門は切っても切れない縁がある。将門公首塚の祟りは今日まで伝えられている。古くは江戸湾の風水害。近くはここが大蔵省が置かれてあったときに幹部の相次ぐ不審死。懇ろに弔っていないビル建設の事故。今でも近隣の大手企業の社員が将門塚を日々拝んでいるという。そして事ある毎に神田明神の神主様が将門の霊を鎮めているのである。

北斗七星信仰。これは古来からある、神聖な七つの場所に鎮魂する風習。将門公の場合、大手門に首塚、胴は神田明神(日光道)、首桶は九段の築土神社(中山道)、手は浅草の鳥越神社(奥州道)、そして足は牛込の筑土八幡(中山道)、四谷門の鎧神社(甲州道)、虎ノ門の兜神社(東海道)がそれぞれ祀っている。これらはいずれも五街道の出入口にあり、時計回りに渦巻き状に造られた堀と放射線状の五街道との接点に位置している。

江戸っ子は将門公の怨念に畏怖を感じると



◆江戸名所図会 神田明神社図

左下門前板橋街道その下は聖堂。鳥居、楼門、そして本社。右下男坂裏門

共に、それが崇拜の念に変わる。江戸人特有の判官鼻眞の傾向もあり、武蔵の雄として将門を愛した。こうして江戸三百年を通じて明神様は江戸っ子の氏神としての貫禄を備えていく。

神田明神といえ、天下祭である。隔年毎に赤坂日枝神社の山王祭と交互に開催され、江戸城内で將軍の上覧に供する。九月の祭りの当日、各町が競って揃えた、絢爛豪華に飾られた三十六基の山車は、昌平坂學問所の西側に敷設されている桜馬場に集結する。一方、神輿、神馬、警護役は神社から発進。昌平坂で一緒になり行列が完成。大鳥居前の広道を東に。広小路を右折して神田川筋違橋を渡り八辻原から須田町、鍋町、鍛冶町などを抜け、鎌倉河岸に出る。神田橋（御門）を左に見て護持院原を囲む町沿いの北側道を西へ。神保小路、今川小路を経て、飯田川、組橋を渡り、九段坂を左に見て中坂を登る。この坂を登り切ったら広小路を左折。正面は田安御門。御

門を通り、城内に入る。ほどなく上覧所。將軍、御台所が謁見。竹橋御門を出て、大手堀をぐるりと周り、大手門前に。將門首塚（旧神田明神跡、酒井雅樂守上屋敷内）に詣でる。ここで神田明神が祀る將門公のからだと首を繋げる神事。この後、東隣の小笠原左京大夫屋敷前を常盤橋御門に出る。正面に金座、右手に一石橋が見える。常盤橋を渡り、城外に出て長蛇の山車列は解散。ここから神輿の行列だけの渡御が始まる。本石町、小伝馬町、大伝馬町、人形町通を練り歩き、小舟町を通って、魚河岸から日本橋に出る。神輿は日本橋を渡ると通一丁目を南下。中橋広小路、南伝馬町を経て京橋へ。橋の手前で左に折れて竹河岸を通過。白魚橋から楓川に沿って北上。日本橋川、江戸橋広小路を左折し、再び日本橋を渡り、室町一丁目を抜けてそのまま北へ。筋違御門前広場（八辻原）に戻る。そして昌平橋を渡り、昌平坂を登って歸社する。

神田祭の山車は壮麗である。各町工夫を凝

らした、ねぶた祭りのような大きな人形が山車に乗る。人形のテーマはそれぞれ異なる。旅籠町は「一翁」、鍋町は「神功皇后」、須田町は「関羽」といった案配。中には多町の「稲穂に蝶」をあしらったしやれものもある（たんぼに蝶で多町）。各町三十六台の山車には順番が決められている。一番は大伝馬町の「諫鼓」、三十六番は松田町の「頼義」。高さは一丈数尺（一丈は約三メートル）に及ぶ。この人形が意匠を凝らした台座に鎮座し、引き車の上に乗せられるので壮観である。派手な祭り衣装を着飾った人々がこれを牽く。いわば江戸のファッション行列。加えて神田祭で一番の人気はいわゆる「附祭」と呼ばれる、はりぼての人形や仮装行列で、山車に混じって動く。これが多くの見物人を楽しませた。

一方、神輿の行列も壮観である。先頭に花笠衣装を纏った人々が踊り、天狗面を被った槍持ちが続く。そして足袋まで白装束、黒高帽子の神主のごとき衣装を纏った人々が神輿

を担ぐ。殿は刀を差した警護の武士。長蛇の行列行は、九月十五日丑の刻（午前二時）から始まり、神社に帰るのが亥の刻（午後八時）。江戸の町を埋め尽くす神田祭りである。

妻恋坂から湯島天神

明神様の男坂の階段を下りて明神下通を左に曲がる。神田明神に接している内藤豊後守上屋敷沿いに再び左折。屋敷が切れた右側から登る急な坂が芥坂（別名、立爪坂。爪を立てて登るほど険しいという形容）。正面にうねり上がる坂。これが妻恋坂である。坂を登り切ると右手角に妻恋神社がある。小さな社だが由緒は深い。この神社は日本武尊、弟橘姫を祀っている。日本武尊の東征の折、嵐で海が大荒れ。どうにもならなくなったとき、弟橘姫が身を投げ、海を鎮めたという。日本武尊の嘆き。鎮魂の妻恋神社である。

道はここで途切れ、神社に沿って右に曲がる。上りの坂道が続く（現、清水坂）。振り



◆神田祭「飯田町中坂上ル図」歌川芳藤：山車が田安御門より江戸城内に入ろうとしている様子を描いている。神田明神資料館

返ると道はどんどん下り、その先を見ると再び登っている。そして目線の高さに神田明神や昌平坂學問所が望める。ダイナミックな山と谷の光景がすばらしい。坂道の左右は三組町の中間屋敷。ほどなく坂道はゆるんでくる（三組坂交差点）。そしてほぼ平坦な道になり、やがて正面に湯島天神表門の鳥居が見えてくる。左右は天神門前町。この参道は山の頂のようで右手一帯は急峻な下り。江戸の町並みが眼下に広がる。絶景。鳥居前、右から登ってくる中坂も急である。急峻な芥坂はこの中坂の途中に出てくる。湯島天神がいかに高台の一面を占めているか、台地の地形を肌を感じる。広重が描いた、女坂を登ったところから眺める北の眺望はすばらしく、眼下に池之端の町屋、不忍池、遠くに寛永寺の伽藍を望むことができた。また、本堂に向かって右手の男坂からは下谷広小路の町屋、南は、江戸湾に浮かぶ佃島まで見渡すことができた。

暗緑の鍍錫銅鳥居を潜る。一直線に石畳が

拜殿まで続く。左右は広場。左手に楊弓場、芝居小屋。湯島天神は菅原道真公を祀った神社で、南北朝時代（一三三六）に処の人々が京都北野天満宮の分霊を祀ったことに始まる。しかし、江戸時代には和歌や連歌の神、芸能の神、書道の神、縁結びの神として崇められた。江戸つ子にとつて湯島天神は「富籤」でお馴染みであった。「江戸の三富」とは、この湯島天神、目黒不動、谷中感応寺の富籤のことである。毎月十六日に開催される富籤の日には一攫千金を夢見る、大勢の人々で大混雑した。境内には茶店、休憩、売薬屋、香具屋、楊弓場、芝居小屋などが立ち並び、門前は料理茶屋が多数あり、さながら庶民にとつては一大娯楽地の感があつた。

落語「初天神」は湯島天神を舞台にした咄で、こまっちゃくれたガキと親父の掛け合いが面白い。新しい羽織をひけらかしたい熊五郎。初天神にお参りに行くといいだす。本音は一杯飲むのが楽しみ。それなら金坊を連れ



◆広重絵「湯島天神坂上眺望」
眼下に池之端の町屋、不忍池を望む

ていつてとおかみさん。あんな奴を連れて行ったらこれ買え、あれ買えとうるさくてたまらない。言いあつていると金坊が顔を出し、「夫婦喧嘩はよくないよ」。結局、おとなしくしていろと言ひ含めて連れて行く。金坊、天神様にくると案の定「りんご買って、みかん買って」。「あんなものは毒だ」と熊五郎。「じゃ、飴買って」。「飴などない」。「おとつあんの後ろ」。飴屋がにこにこしている。今度は風をねだる。一番小さいのを選ぶとするとまた金坊が風屋と結託。結局、特大を買わされる。金坊なかなかうまく上がらない。そのうち親父の方が夢中になり「上がった、上がった。やっぱり値が高いのは違うな」。「あたいの」うるさいな、あっちに行つてろ」。金坊、泣き声になつて「こんなことならおとつあんを連れてくるんじゃないか」。初天神は、江戸人にとって初詣に次いで重要な一月の祭事であつた。

天神様の境内を左に歩くと裏門。そこはも

う下からうねり上がつてくる切通坂と接している（現在、石の大鳥居があるところ）。こを左に曲がつてなお坂を上がる。すると右手にこんもりとした森。臨済宗妙心寺派、麟祥院である。三代家光の乳母、春日局の菩提寺。表は切通坂に面し、敷地面は現在の三倍はある。春日局の意をくみ、家光が贈つた土地である。春日局の法号、麟祥院を寺号にするように命じたのも家光。彼女はここで余生を送り、寛永二十年（一六四三）六十五歳で没する。無縫塔の墓石には小さな丸い穴が四方に貫通してあけられている。これは「死後も天下の政道を見守れるように」という遺言に基づく。死して尚、家光の将来をみつめんとする彼女の意志の表れである。寺の周囲にはカラタチの生垣が巡らされていた。そこで処の人々はカラタチ寺と呼んで親しんだ。明治二十年、井上円了はこの麟祥院境内の一棟を借りて私塾「哲学館」を開校する。東洋大学の前身である。

【参考文献】

「神社の系譜」 光文社新書 宮元健次 著
「江戸人の文化」 神田明神資料館

前々号で拙著『朝めしの品格』の帯に、がん医療を専門とする帯津良一先生からいただいた「『ごはん、味噌汁、漬物』を基本とした…(略)…この『朝めし』には『希望』があります」という一文を紹介しました。しかし、この『希望』がある食事」というのは先生のオリジナルではありません。

常々、がんの患者さんから、「どんな食事がいいんでしょか」と訊かれて、「食べることのときめき」が大切だと考えていた先生は、ある時に美食家でも知られた作家、故・立原正秋さんのエッセイ集を読んでいて、「これだ!」と思ったのでそうです。

立原さんは、例えば冬の夜中に仕事をしていて腹が空いてくると、自分で簡単な雑炊をつくる。冷や酒をのみながらこの「まことに飾り気のない」熱い雑炊をすすめるのだそうで、子どもたちが遅くまで勉強していれば声をかけてともに食べ、こう書いています。

「この冬の夜半の雑炊には希望がある。上等な食べものではないが、日常のたし加さがそこにある

ように思う」(『冬の夜の雑炊』『美食への道』所載) うーむ、なかなかいい言葉であるナ、とあなたも思うでしょう?

では、その立原さん自身の「希望がある」朝めしとはどんなものだったかというところ……。

十時頃に目を覚ますと、まず中瓶のビールを一本飲む。それから洗面をし、散歩に出る。行き先はおおむね住んでいた鎌倉の漁港で、漁から戻った船があれば漁師に獲物を分けてもらい、それに遅ければ魚屋に足を運ぶ。求めるのは多くの場合アジで、刺身にもたたきにも塩焼きにも干物にもよい「飽きない魚」だと言っていますが、時にはアワビ、トコブシ、サザエ等も購入、アワビは刺身か酒蒸し、トコブシは薄味で煮、サザエは刺身か炭火焼き。そして、何とそれらを肴に、そこから日本酒を三合ほど楽しむのだと言うのです。

そののち、ようやくごはんとなるのですが、めしはスシ米四分、麦六分の麦めし(といってもコメはスシ米!)。味噌は常時五種類以上揃え、一番うまいと思うのは八丁味噌で、味噌汁の実は豆

腐と浅葱。漬物は塩以外はいっさい入れないぬか床に漬けた蕪か大根のぬか漬け。それに自家製の梅干し一個とラッキョウ三粒。さらに海苔。そして「蒸しカレイかカマスの子物、納豆は欠かせない」と言っています。

とはいえ、ときに風が強くて魚が揚がらない日があり、そんなときには、そのことを心得ている家人が甘みのない葡萄酒に漬けておいてくれたサーロイン肉を鉄板で焼いたビフテキです。付け合わせは生焼きにしたタマネギとサラダ菜に酢漬けの青トウガラシ。この場合、飲み物はスコッチウイスキーか、ブランデーと変わります。

そして、和であれ洋であれ、この一連の朝めしに一時間はかける、と書いているのです。

家人はさぞ大変だったろうと思わずにはいられませんが、彼は自分のこの朝めしについて、こう書いています。

「あさめしに他の人がどんなものを摂っているのか私は知らないが、私は前夜の残り物を食べるのが嫌いだ。一汁一菜というのも私の好みに合わない

い。ひやめしも好まない。(略)その人が何を食べたがるかは、その人の精神 形態によるものだろう。(略)家人はその間、まあいをはかって皿を並べてくれる。すこしでも料理が冷めていたら私は箸をつけない。こう書きしるすと、私はひどい暴君のようだが、しかしこれは、私が作家としての日常生活を維持して行くための最低条件である。これを崩すわけにはいかない。(略)最後に、あさめしはゆっくりたべるべきである」「あさめし」「秘すれば花」所載)

何ともすごい朝めしですが、彼はこれを自分の作家としての人生のキマリとしていた。いわば人生表現の一つとしていたのです。

「朝めしは生き方である」——そんな言葉が思い浮かびました。それで、その言葉で拙著では一章を立て、前回の向田邦子さんの話などから昭和天皇がじつは朝は洋食であり、それも生き方だったということなどを紹介したのですが、はたしてよく自身はどうかというと……ここでもハハハと笑うしかありません。

浄土誌上句会

●雨

〔特選〕雨男ひとり加えて桜狩り

斉田 仁

「花曇り・花の雨」という季語が示すように、
雨の心配される時である。雨男が居て、それ
でも何とか降らずにいてくれるが、帰るまで
持つかどうか。折角の桜狩りが楽しく終わら
なければ、雨男のせいである。

〔佳作〕老犬に欠伸うつして春時雨

佐藤 雅子

雨けぶる神域の杉苔這いぬ

石原 新

春雨や傘立てのなき定期船

井村 善也

●坂

〔特選〕罫りや坂に積み置く離郷の荷

池田 伊吹

自分の生まれ育った土地を去る日が来た。
坂道に沿う家並みの一軒だろう。道の片隅に
引越しの荷物を積んでおく。多分車に積み

込むのだ。いつもは気にもしなかった小鳥の
囀りが、妙に心に沁みて聞こえる。

〈佳作〉 坂道にせり出して咲く桜かな

鈴木真理子

通るたび交番無人春の坂

横山美英江

坂の上苔の花咲く地藏尊

山口 信子

●自由題

〈特選〉 去年より一人少なき花見かな

工藤 敏行

どういう仲なのかは読者に任されている
が、小中学校の同級生とすると、年齢も揃っ
ていてよからう。毎年集まっているのだが、
今年は一人減ってしまったという。どうもあ
まりよい話でなさそうな気がする。

〈佳作〉 ぞっとするほどの明るき花の道

内藤 隼人

陸橋を渡る葬列春疾風

増田 信子

廉売や妻の目利きで鰻を貰う

東 保



光 自由題

兼題
季節ではありません

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会 〈編集部選〉

■雨

種蒔きてひたすら雨を待ちにけり
雨あがる門灯の影花つつじ
ゆつくりと人の近付く花の雨
春の雨傘触れ合いぬ歩道橋
雨後の庭二つの蝶の舞い踊り

金谷友江
當間アサ子
小林苑を
浜口佳春
山口信子

■坂

坂道や寺の白蓮散りそめぬ
登り坂下り坂あり新社員
やまぶきに胸突く坂を励まされ

金谷友江
佐藤雅子
當間アサ子

締切・二〇〇九年六月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年八・九月合併号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

より太き桜の多し男坂
永日の坂をのぼれば鳴るピアノ
男坂女坂にも春の声
緑陰の坂に画廊の潜り口

工藤 掉
浜野具円
袴田正隆
今井藍子

■自由題

蹲に春禽の来て観世音
ほつほつと鈍び紅の牡丹の芽
葉か花か競いて芽吹く楓かな
ぶらんこを蹴り上げひとり帰る子よ
桜散る余生のページまためくる
テーブルに丸椅子三つ鳥交る
出遅れてひとりぼっちの花見かな
貝の上貝が舌出す日永かな
逝く春やだんだら坂の興信所
子の息を空へつつんでシャボン玉
廃校の鉄棒の下すみれ咲く
老いの歟入れて整う春田かな

佐藤雅子
金谷友江
當間アサ子
三宅大彦
小林暢夫
浜野具円
立神貞子
中嶋敏博
梅谷孝明
中村真一
斉藤幸雄
佐藤ゆう

さっちゃんね



61

かい目

かまち♡しろろ

かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊・中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



紫陽花を雨天の友と歎びし

岱潤

先日ある会で他宗派の方が、「畜生の畜生って、犬や猫のことじゃないですよ」と言われた。「犬を飼っているのですが、彼のあの純真さ、ひたむきさ、そして従順さは人以上だ、最近じゃ子どもよりも私を癒してくれそうですよ」と言っていて笑った。そういうえばこの間テレビで、ある劇作家が最近の子どもの「ままごと遊び」の様子を伝え、ママやパパになりたがらないという。一番なりたがる役は、驚くなかれベツトだというのである。

仏教では畜生道を地獄・餓鬼に続く三悪道の一つと説く。そして「三悪道に墮

ちる」とか、「三悪道から脱する」とか言うように、悪い行いをするることによってこの三悪道に墮ちるから、そこから脱しなければならぬとする。ならば三悪道とは人の道にはずれたことと考えた方がいい。畜生道は性の倫理性に外れ、餓鬼道はプラスすべての欲望の倫理性に外れ、地獄道はプラス生命の倫理性に外れた者と考え、畜生や餓鬼はその象徴にすぎないと考えられる。よく犬猫にも劣るとか、地獄の黙示録などという言い方はまさにそれを著している。最近死刑になりたくて大勢の人を殺したなどという者がいる。まさに地獄に墮ちた姿そのものである。

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
臈博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

ここのとこのベツトブーム、飼い主たちに「仏教では畜生は三悪道ですよ」となどと真顔で説くことは、やめた方がいいのでは。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成二十一年五月二十日

発行

平成二十一年六月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三・三三七八六九四七

FAX

〇三・三三七八七〇三六

振替

〇〇一八・八・八二八七

けん ぞく い にょう
 眷属圍饒

眷属に圍饒されて
 観無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
 東京高輪・光福寺住職

家族・友人は多ければ多いほど、幸せである。

人はだれでも、非力ゆえに、いくつかの「世界」、グループに所属して生活しております。家族、親族、学校ともたち、職場のなかま、近所付き合いをして、お互いに、技量を提供し支え合いながら、豊かで楽しい社会を作っています。

人は親を亡くしても、その瞬間から、親の人柄、容貌、自分との関係などを忘れられるものではあ

りません。ほとけのいのちをもった人との交流の世界を信仰の世界と言います。この世界を持つことによって、ほとけの体験や知識を活用できれば、自分だけの知識や体験だけで問題にあたるよりは効果的です。

信仰の世界を持つ人は、持たない人よりも、より充実した、より幸せに暮らせるでしょう。

法然上人鑽仰会の

本

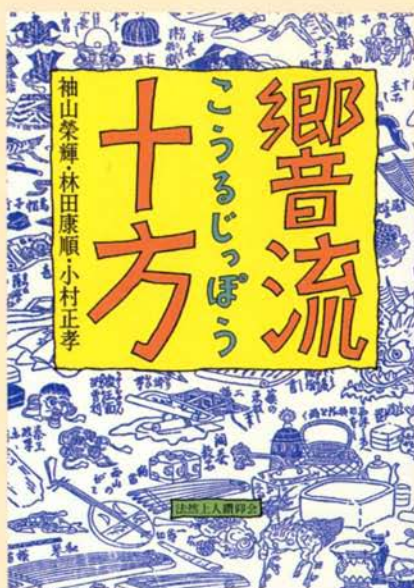
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう

600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠一巻本」より